

(6) 手術を受けた子どもの離床時の看護援助に関する研究

川崎医療福祉大学大学院保健看護学専攻 ○井上 清香

川崎医療福祉大学保健看護学科 中新美保子

【要 旨】

本研究の目的は、手術後の離床の場面において患児と看護師の関係性に焦点を当てて看護の実態を明らかにし、効果的な看護援助を考察することである。A病院において平成27年3月～平成27年7月の間に漏斗胸（バー挿入）手術と顎裂部骨移植術を受けた子ども（7歳から13歳まで）とその母親並びに子どもの離床援助に関わる看護師を1組とする計7組を対象に、参加観察および半構成面接を行い質的帰納的に分析した。その結果、7つのテーマが抽出された。【離床の進行と共に痛みの程度の変化を捉えて引き際を瞬時に決める】【ベッドコントローラーのリモコンを本人に調整させ患児に主導権を持たせる】【最大限の痛みの軽減をして患児の覚悟を誘い離床のタイミングにする】【動きたい気持ちはあるが動けない

患児と同疾患の治療体験を持つ母親の間で調和をとる】【想定外の出来事により患児の主体性を引き出せず、母との相互も埋められないままの離床達成により関係の危機が生じる】【患児の痛みに対する訴えを上手に引き出し、痛みの向き合い方を適切に伝えることで離床の決意を促す】【看護師の過去の経験から初回は無理をさせないことを念頭に患児の適切な離床を判断する】であった。この結果から子どもの離床援助において、看護師は、子どもの心情を上手に引き出すコミュニケーションをとることや子どもに主体性を持たせた離床をすること、初回の離床援助が次の離床へと繋がるように関わること、また、離床の場に母親がいる場合は、離床場面における母親の役割を調整することが重要であると示唆された。